

紀伊半島大水害から7年

ブランド米栽培取り組み

ブランド米「飛雪」と交流も続く

紀宝町浅里地区

平成二十三年九月の台風12号の上陸による集中豪雨で、紀伊半島地域に大きな被害をもたらした紀伊半島大水害から三日で七年を迎えた。甚大な被害を受けた紀宝町浅里地区は、ブランド米「飛雪米」を栽培するなど復興に向けて住民、体となって取り組んできた。区長を務める木下起章氏（68）は「水害前より活気が出るようにさまざまことに取り組んできた」と振り返り、大変なこと多かったが「つながりや広がりもできた」と復興に手応えを感じている。【15面に関連記事】（越智浩子）

四十七世帯八十三人が暮らすまでの間、高齢女性と、浅里地区に入れず、暮らししていた浅里地区では土、夫婦ら十人でパンを分け合、石流で奥道が塞がれ、孤立、ったり炊き出しをしたりした。木下さんから住民は六、て助け合って過ぎた。日朝に自衛隊のヘリに救助、同町は熊野川が氾濫し、された。木下さんは「ヘリ、浸水や土砂による住宅など、の全半壊、大規模半壊は千、に、全国に先駆けて事前防、災行動計画「タイムライ、四世帯に上った。道路が復、ン」を導入。同町のタイム、旧するまで約一カ月半の、ラインでは、役場の担当課



飛雪米の栽培に取り組んでいる木下さん。紀宝町浅里で。



水害後、住宅などが倒壊した紀宝町浅里地区
＝平成23年9月、木下起章氏撮影

別に二百四十項目の役割が決められている。総務課防災対策室によると、導入前は台風のピーク時に避難する人が多かったが、導入後は早めに避難する人が増えたという。八月に発生した台風20号でも、避難所に食糧物を持参し早めに避難する人が多く、「住民の意識も変わってきた」（防災対策室）と話す。復興への取り組みとし、今年四月は同地区に町営

て、浅里地区は水害後、犠牲者の冥福を祈る「キャンドルナイト」や、郷土会「なれ寿しを知ってもらおう」と「なれ寿しまつり」などイベントを開いてきた。二十七年には任意団体として立ち上げていた浅里地区の住民らでつくる「飛雪の滝百姓塾」を法人化し、木下さんが代表理事に就任。飛雪の滝の水を使った飛雪米をブランド化する取り組みを始めた。同年には、水害直後、復興活動に当たった「岡谷鐵機」（愛知県名古屋市）と「嵐山村活性化の取組に関する協定」を結び、社員がブランド米で稲刈りに訪れるなど、交流が続く。